

解説と観察を取り入れた モルモットを用いた 小学校向け団体プログラム

足立区生物園
鈴木高嶺

1

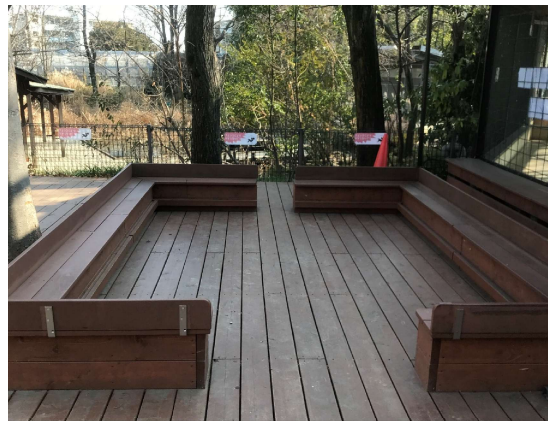
コロナ前のふれあいコーナー

屋外のベンチで実施

注意事項の後、モルモットを膝に
乗せる（団体は一人1分程度）

夏冬の気温の問題等から、室内に
移す計画が上がっていた

→コロナ感染拡大



2

コロナ禍のふれあいコーナー

一般・団体共にふれあいは中止

ふれあいルームに飼育エリアを移動

モルモットを観察してもらう
飼育員が常駐し、解説
(平日・夏季のみ餌やり体験)



3

コロナ禍のふれあいコーナー

来園者とのコミュニケーション・来園者同士の会話を聞く機会が大幅に増加

↓

- ・解説の重要性を再認識
- ・飼育員たちと来園者の「認識の違い」に気付く

飼育員にとっての常識が、来園者の常識ではないことがある
動物たちへの敬意・愛情の差

4

認識の違い①

意外と知られていなかったこと

- ・モルモットの視野の広さ
- ・食性
- ・習性
- ・ネズミ目の中にもいろいろな科・種がある

「身体の造りや習性には野生での暮らしの中の生存戦略が大きく関係している」

5

認識の差②

敬意・愛情の差

ヒトに懐きやすい・飼いやすい習性がある = 知能が高いと判断する

→ヒト中心の考え方

餌やりをじらす来園者（大人も）

→おもちゃ感覚

6

ふれあいの再開

コロナが5類に引き下げられたタイミングで一般来園者向けのふれあい再開

次年度からの団体対応も再開決定

→ふれあい中止期間中の経験を経て、

今までの「触るだけ」のふれあいの見直し

7

手法

解説→ふれあい→質問解答・まとめ

使用した物

ふれあい用の台 (90×90×50cm)

モルモット…4頭

解説イラスト

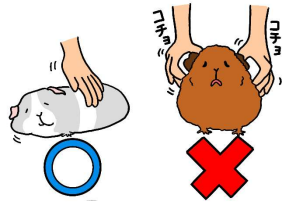
模型

1～3年生・4～6年生で解説の内容を分ける



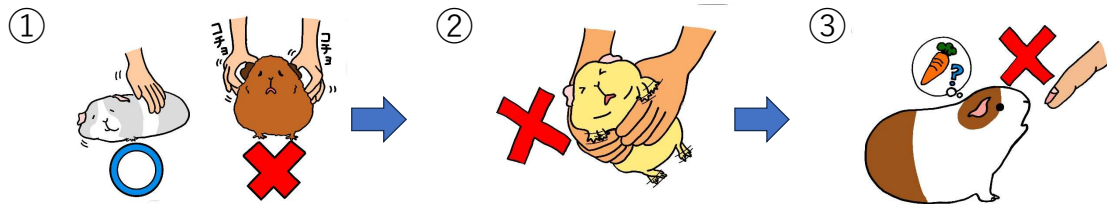
8

使用している図



9

1～3年生



④クイズ

「なぜ口が身体の下側の方についていて、目が頭の両横についているのでしょうか？」

(正解：天敵を見つけやすくするため)

10

1～3年生

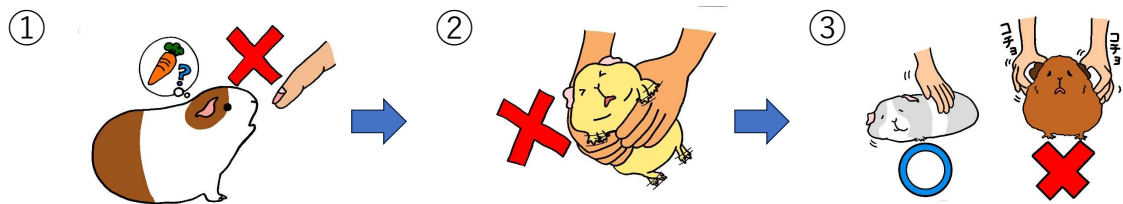
⑤模型を使った解説



ヒトと違って口元が見えない=劣っている、ではない
 生き物の身体の仕組みには生き残っていくための様々な工夫が
 詰まっていることを説明

11

4～6年生

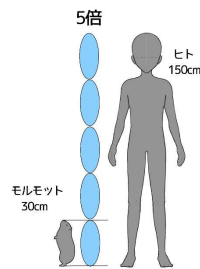


④モルモットとヒトの大きさ比較についての話
 (ふれあいコーナー脇に生えている木を使って説明)

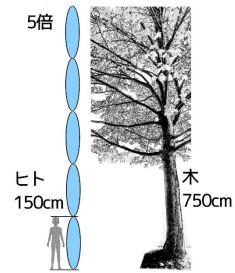
12

4～6年生

モルモットとヒト



ヒトと木



「自分がされたらどう思う？」という脳の置き換え機能が完成するのが大体10歳前後と言われているため(ピアジェの発達段階を参考)

13

重視したこと

コロナ禍で感じた「認識の違い」を埋める為には何を伝えていくべきか

ふれあいや知識をつける前に「心の土台作り」が必要

心の土台とは・・・

生き物への正しい理解・敬意・愛情

14

結果（1～3年生）

正解率…30%程度

年齢が上がれば正解率は上がるが、すぐに全員が答えられるわけではない

誤回答の例

- ・「獲物」を見つけやすくするため
- ・草を見つけやすくするため
- ・人間とは違うから
- ・みんな同じだとつまらないから

15

結果(1～3年生)

クイズ形式にすることで

- ・「言われてみれば知らなかった・考えたことがなかった」

という気付きを与えるきっかけになった

- ・聞き流されることがなくなった

→広範囲が見えることに対して「すごい」という声が出るように

16

結果(4～6年生)

遠足時によく見られる「興奮」「遊び感覚」が抑えられ、
学びのある内容になった。

「遊び感覚」はなくなったが、じっくりと観察をしたり感触を確かめることで、観察によって発見したことに関する発言や飼育員への質問が自然と出てくるようになった。

→“Fun(楽しい)”ではなく“Interesting(面白い)”

17

考察

今回のプログラム作りの順番

来園者の声を聞く

↓

何を伝えていくべきかを考える

対象年齢

↓

プログラムの作成

18

今後の取組み

団体プログラムの内容の更なる充実

- ・ 事前/事後学習
- ・ 学習中の単元とのつながり

一般来園者向けのふれあいコーナーへの応用

- ・ 特に力を入れる内容マニュアル
- ・ 掲示物

19

ご清聴ありがとうございました

20